

Wayne Dowler
Classroom and Empire:
The Politics of Schooling Russia's Eastern Nationalities 1860-1917

Montreal: McGill-Queen's University Press, 2001. 296pp

五島和哉

1. 研究史と著者について

Susan Layton の“Russian Literature and Empire”(1994)¹をその代表として、ロシア文学の領域でも、エスニシティあるいはサイード的なオリエンタリズムの視線にまつわる研究は盛んである。著者 Wayne Dowler はトロント大学の歴史学教授であり、本書“Classroom and Empire”は歴史学というディシプリンの上で成立しているが、19世紀の教育家イリミンスキイの方法論（イリミンスキイ・メソッド）とその活用法を中心に、教育にまつわる資料を分析した本書は、サイード言うところの、支配をめぐる「言説分析」を実践した書として、文学研究にも有効な視点を与えてくれるだろう。

前述したように著者 Dowler は歴史家だが、これまでの著作“Dostoevsky, Grigor'ev, and Native Soil conservatism”(1982)²および，“An Unnecessary Man: The Life of Apollon Grigor'ev”(1995)³はともに文学・思想関連のものである。前者はヘルダー、シェリングらのドイツ思想に端を発し、個々の民族が独自性を發揮することこそが、全体的な人類の融和にもつながるとする「国家」主義的思想が、50年代に『モスクワ市民』の若い編集者であったグリゴーリエフの「有機的批評」を経て、60年代ドストエフスキイ兄弟の『時代（ヴーミヤ）』『世纪（エポーハ）』の土壤主義に結実するまでを、雑誌資料の総合的な読み込みから明らかにするものである。後者は詩人・批評家としてのグリゴーリエフの評伝だが、「国家」や「民族」に関する視線は失われていない。Dowler 自身の方法論への言及は極めて少ないが、三冊目の著作である本書は、ナショナリティやエスニシティをめぐって総合的な言説分析を続けてきた著者が、はじめて教育という直接に政治に関わる分野に進出したものだとえるだろう。

ロシア史や地域研究の分野においては、日本でも既に同様のテーマによる先駆的な研究がなされている。たとえば西山克典「帝国の『東方』支配——『同化』と『異化』によせ

¹ Cambridge University Press.

² University of Toronto Press.

³ University of Toronto Press.

て——」は、「同化」と「異化」という大きな視点から、本書と同じ教育政策を分析したものであり¹、タタールの側の視点から「新しい知識人」の形成とその民族に関する言説を分析した、長縄宣博「ヴォルガ・ウラル地域の新しいタタール知識人——第一次ロシア革命後の民族に関する言説を中心に——」では、本書で扱われるイリミンスキイの運動を批判的に捉えるタタール知識人の言説が扱われている²。

2. 梗概

ドストエフスキイが1861年、『時代』誌上に掲載した「ロシア文学に関する一連の論文」の第三、四論文が「机上の知識と読み書きの能力 *книжность и грамотность*」と題され、民衆に対する文学教育が問題とされている³ことからも分かるように、農奴解放以降のロシアでは民衆教育の問題が大いに議論され、1864年の教育令の発布以来、初等教育の普及は国家的な課題であった。また同じ時代は、Dowler が最初の著作ですでにテーマにしていた、ロシア人の民族意識が高まった時代でもある。これらの問題が交差する場所が、帝国東方地域における非ロシア人への学校教育の問題であったと言えるだろう。

Dowler は序文において、ロシア人の東方に対する視線は、西欧（文明）に対するロシア（未開）という位置関係を、ロシア（文明）——東方（未開）の関係に置き換えようとするものであったとしている。ロシアにとってオリエントとは、すでに数世紀にわたって身近に接してきた存在であり、それとの関係をどのように近代的な国民国家の枠組みのなかに構築するかが問題なのだ。また、チャアダーエフがイスラム教徒を「潜在的なキリスト教徒」と考えたように、東方のイスラムを正教徒として一体化しようとする考えがあったのと同時に、ただ単に、野蛮なタタール（ムスリム）をロシアが西歐的な文明で教化するといったような発想があったことも指摘している。本書でおもに扱われる学校教育の問題も、帝国領内の異民族（とくにムスリム）を、宗教的・精神的に正教徒として「同化」すべきなのか、制度的に「支配」すべきなのか、という点に重点がおかることとなる。

本書の中心となる人物、ニコライ・イリミンスキイは熱心な正教徒であり、異民族の正教による「同化」を目指した人物である。ロシアの「東方」、ヴォルガ河中流以南の地域では、ムスリムが経済的・社会的な支配権を持ち、イヴァン雷帝の征服以降強制的に正教徒にされていた非ロシア人の、実質的な棄教・改宗問題が顕在化し、国民国家の成立への障壁となっていた。イリミンスキイは50年代半ばにタタールの村を調査し、タタール文語、イスラム告白学校の普及に対抗するため、ロシア語による教育の必要性を感じる。そ

¹ 『ロシア史研究』第72号、2003年、34-50頁。

² 『スラヴ研究』第50号、2003年、33-62頁。

³ Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в тридцати томах. Т.19. Л.:Наука, 1979 .С.5-57.

の後 60 年代に、彼が確立した方法論（イリミンスキー・メソッド）は、1) 倫理（宗教）教育の学科教育に対する優先、2) キリル文字で表記した現地語教科書によるロシア語・正教教育、という二つの特徴を持ち、イリミンスキーはカザン中央受洗タタール学校を設立して、みずからの方針を実践。やがて聖グーリイ協会や教育大臣ドミートリイ・トルストイらの庇護を得て、1870 年には彼の方法論が国家の教育政策として採用される。Dowler は異民族の精神的基盤となっている、イスラムやアニミズムの伝統を無視せず、ロシア語教育によって異民族エリートの育成をも目指す、イリミンスキーの融和的な方法論を高く評価し、その効果を叙述しているが、Adeeb Khalid が書評¹で指摘するように、Dowler は資料をカザンの文書館中心に集めており、イリミンスキー・メソッドがあまり普及しなかったクリミアやコーカサスなどの地域には多く言及していないことには注意しておくべきだろう。

イリミンスキー・メソッドは国家の庇護を受けて全国的に普及し、非ロシア人に対して一定の教育効果をあげるが、文語をもたない少数言語をキリル文字表記して、教科書や聖典の翻訳を作ることで、かえって少数民族のアイデンティティ確立を助長するのではないか、というような批判もあった。実際に、イリミンスキー・メソッドは既にキリスト教化された民族の棄教・改宗防止には一定の成果をあげたものの、ムスリムの同化にはあまり効果的でなかった。この理由としては、通商上の必要から、ロシア語教育を歓迎したムスリムも、とくに露土戦争後にはロシアの同化政策に不安を感じ、ロシア語を修得した時点での中途退学者が多くなったことが考えられる。また 1890 年代以降、社会的ダーヴィニズム、優生学に根拠を持つ人種主義の流行や、アメリカから流入した外国语教育の「ナチュラル・メソッド」（外国语教育のさいに、生徒の母語を用いない教育法）の影響により、一時的にイリミンスキー・メソッドの流行は翳りを見せるが、1905 年にドゥーマが信仰の自由を宣言すると、再び顕在化した棄教・改宗問題に対する穏やかな対処法として再評価を受けることとなる。

3. 展望

Dowler が問題化しているのは、イリミンスキーの宗教的な寛容を持ちあわせた同化政策と、反イリミンスキー陣営のいわゆる「国家主義的」な同化政策の違いであろう。この両者はともに、ロシア（キリスト教文明）一東方（未開）とするオリエンタリズムの視線であることでは共通しているが、その実践において大いに違っている。Dowler の行った特定の地域に関する緻密な分析は、支配の視線を一括して「オリエンタリズム」の名で呼

¹ *Slavic Review* 61:3 (2002), pp.618-619 同書への書評は、この他に Martha Merrill によるもの (*Slavic and East European Journal* 46:1(2002), pp.204-206) がある。

んでしまうことへの警鐘ともなりうるだろう。また、ロシア正教の布教の一環としての学校教育、としてイルムンスキイ・メソッドを捉えるならば、この方法論を採用する教会学校が現地語に翻訳して教えた聖書学、聖歴史、カテキズム（教理問答書）、聖歌といったものが、明治期の日本正教会でも神学校の科目となっている¹ことが注目に値する。すなわちわれわれは、駿河台ニコライ堂日本正教会の研究を通じて、ロシア正教会の布教政策の実態を知り、Dowler の分析した当時の教育言説から、ニコライの布教の根本にあった思想を知ることができる。すなわちこの書は、非常に身近な問題として、ロシアの「オリエンタリズム」の問題を考察するきっかけとなりうるだろう。また、前述の長縄宣博の論文のような、非ロシア人の側からの研究も今後重要である。

Dowler の著作は、一見エスニシティの問題に関する教育制度史のようにも見えるが、彼がこれまでにってきた文学・思想のテクストの読み込みを通じ、歴史や文学といったディシプリンを超えた、まさに領域横断的な視点を与えてくれる名著である。

¹ 長縄光男『ニコライ堂の人びと 日本近代史のなかのロシア正教会』現代企画室、1989年、70頁に明治16年（1882年）の『正教新報』に掲載された神学校の科目一覧がある。